

タブレット 学ぶ力育つ

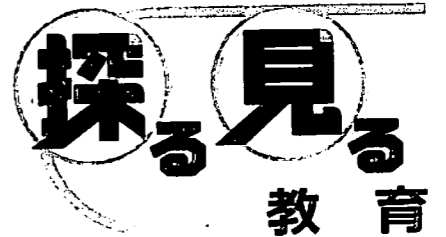
インターネットに接続できるタブレット型端末を授業で使う中学校や高校が道北でも増えている。辞書や百科事典の代わりに使える生徒には有用だが、教員によって利用度合いが異なったり、生徒が自宅に持ち帰った時に無線LAN環境がないため「宝の持ち腐れ」になることがあるなど、課題も少なくない。1、2年生全員に配布している旭川藤女子高を例に、利点と課題を探った。(旭川報道部 古谷育世)

1、2年に全員配布 旭川藤女子高

「i」に「n」を入れるのかな。旭川藤女子高2年の英語の授業。斉藤ななみさん(17)ら3人は今月中旬、タブレット端末「iPad mini(アイパッドミニ)」を使い、グループ発表の資料を作った。

斉藤さんは「資料制作のほか、これまでパソコン室に行かなければ分からなかったことが教室で調べられて便利」と話す。指導する松橋晃輔教諭(31)も「興味を持ったことがすぐに調べられるようになり、生徒のやる気が上がった」と感じている。

道北では既に初山別村や遠別町、東川町などが全小中学校でタブレット端末を活用した授業をしているほか、旭川・西神楽中、道教育大付属旭川中などでも導入されている。国の高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部が2010年に策定した「新たな情報通信技術戦略」で、20年度までに全児童・生徒に1台ずつ情報端末を配備すること



た」と高く評価する。

同校では日常の授業で問題を解く時もタブレットを使っている。生徒の答えを教師が手元で見ることができると、松橋教諭は「これまでは試験しか理解度を知るすべがなかったが、どこでつまづいているか適宜分かる」と指摘する。

便利な一方、人間関係にトラブルが生じる恐れのあるソーシャルネットワークサービス(SNS)は、接続できないようにアプリ(応用ソフト)を入れていない。

そのほかの課題もある。タブレット利用は教員個人の裁

すぐに調べ意欲向上 教員により使用頻度に差

を目標に掲げ、市町村などへの補助金も予算化されたことなどが追い風となった。

旭川藤女子高では費用を学校側が全額負担し、今年8月から1、2年生全員にアイパッドミニを配布。来年4月の新入生全員にも配布する予定だ。愛着を持って使ってもらうため卒業後も返却義務はない。

タブレットを手にした生徒の顕著な変化は、特に自発的に調べることが重要とされる「調べ学習」に現れている。谷島久雄副校長(54)は「調べ学習が格段に増え、情報が広がることで生徒の学びたい気持ちを引き出し、能動的に学習するようになってきた」と

量に任せているため、授業での使用頻度に差がある。松橋教諭は「教員より生徒が習熟している、私も使い方を生徒から教えられたことがある」と明かす。

さらに、冬休みには生徒がタブレットを家に持ち帰って宿題をこなすことにするが、自宅にインターネットや無線LAN環境が整っていないければならないという条件が付く。

来年には全教科でタブレットを活用した授業をする方針を示した谷島副校長は「教科の特性を考慮しながら、教員同士が情報を共有する体制をさらに整えていく必要がある」と強調した。



タブレット端末を使って英語の授業に取り組む旭川藤女子高の生徒たち

藤女子高生が留学生と討論
旭川藤女子高(水野清哉校長、249人)で留学生と英語で議論する「高校生国際会議」が23日、開かれ11写真11、同校3年生21人と留学生12人が意見を交わした。



会議は同校の授業の一環として毎年開かれ、今回で10回目。英語を重点的に学ぶU1(ユニバーサル・ラーニング)コースの3年生が国際問題に関するテーマを自分たちで考えた。今年のテーマは「教育」。アメリカ、中国、ロシアなどから札幌や旭川に留学している外国人高校生が参加し、熱心に討論した。

実行委員長の開羽瑞奈さん(17)は「インターネットや本ではわからない、生きた情報が得られてよかった。留学生から『日本の高校生は授業中にあまり発言しない』と言われ、ハッとした」と話していた。

会議の内容などを自分たちでまとめ、来年3月に英字新聞を発行する。

(古谷育世)